The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィリピン語の動詞を伴う存在文と所有文の誤用分析：中級学習者の文における文法上の正確さに着目して
Author(s)	矢元，貴美
Citation	言語文化研究. 2023, 49, p. 203-223
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90953
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フィリピン語の動詞を伴う存在文と所有文の誤用分析
―中級学習者の文における文法上の正確さに着目して

矢　元　貴　美

Error Analysis of Existential and Possessive Verbal Constructions in Filipino Language:
Focus on Grammatical Correctness of the Sentences among Intermediate Learners in Japan

YAMOTO Kimi

Abstract

This article aims to analyze the errors of existential and possessive verbal constructions in Filipino language among Japanese native speakers who major in Filipino by focusing on grammatical correctness. It is difficult for learners to construct sentences with various focuses. The errors in 34 patterns of sentences which were collected from quizzes, semestral final exams and exams for promotion in intermediate grammar classes for sophomores from 2019 until 2022 were examined. The errors were first classified into two large categories, linguistic category and surface structure. Under the linguistic category, they were categorized into marker, aspect of verb, conjugation of verb, focus of verb, affix of verb, linker and vocabulary. In surface structure, they were categorized into omission, addition, misformation and misordering. The sources of errors are language transfer in both the source language and target language, learning strategies, and ineffective digestion and absorption of grammatical items already learned.

キーワード：誤用，フィリピン語，言語習得

1．はじめに

本研究の目的は，日本語話者による動詞を伴う存在文と所有文の誤用を，文法上の正確さに着目して分析し，誤用の原因を考察することである。フィリピン語を専攻語として学ぶ学生の誤用例に着目し，今後の教材開発や教授法研究につなげたい。

日本語話者を対象としたフィリピン語教育に関する先行研究には，フィリピン語教育を取り

巻く現状と課題および学習者の困難を取り扱ったOue（1997），学習環境に着目しフィリピン語教育の課題を論じた高野（2009），子ども向けフィリピン語教材の開発と評価を扱った矢元（2018b）のほか，本研究と同様に誤用を取り扱ったものとして，作文の誤用例とその原因を分析した高野（2010），動詞導入前の段階における誤用例を分析した矢元（2018a）がある。

矢元（2018a）では初学者による綴りの誤用と文法の誤用を分析している。綴りの誤用に関しては，発音と綴りの相関関係を意識させること，文法の誤用に関しては，初期段階で習得すべき文法事項を繰り返し確認させることが重要だと述べている。高野（2010）では作文の誤用例が多く挙げられ，その原因と具体的な課題も示されており，実践に非常に役立つ。本研究で焦点を当てるのは，動詞を伴う存在文と所有文という特定の構文であるという点，また，中級の学習者を対象とするという点において，上記2つの研究と異なっている。

日本語話者がフィリピン語を学習する際，綴りや発音の習得は容易であることに比べると，文法規則の習得には労力を要する。先行研究でも，「学生たちにとって難しいのは多くの文法規則である。中でも，彼らにとって最も難しいのは動詞である（Oue, 1997: 30 引用者訳）」，「時間をかけなければならないのは文法事項，特に複雑な動詞の構造である（高野 , 2009: 302）」と指摘されている。フィリピン語の動詞は接辞と焦点が豊富であるため，初級の中盤から中級にかけての比較的長期にわたって学習することになっており，学習者にとって難関である。誤用分析においては，理解可能性と誤りの重大さという視点も重要であるが，文法規則の習得に労力を要する言語を取り扱うことから，本研究では文法上の正確さに着目する。

フィリピン語では存在詞が存在文と所有文の両方を表すために用いられることから，併せて提示されることが多い。日本語では「～がある／いる・ない／いない」という存在文と「～を持っている／いない」を表す所有文とでは，語彙も構文も異なるため，別に議論されることが一般的である。両方に存在詞が用いられることは，学習者にとって学習項目が1つで済むという利点もある一方，細かい相違点に注意する必要があるという点では混乱も引き起こしやすい。

本研究で分析対象とする動詞を伴う存在文と所有文では，構文，動詞の焦点や相，語彙の選択，語順，繋辞（リンカー），小辞や標識辞（マーカー）といった複数の要素を適切に使用する必要がある。初級の前半で学習した基本的な文法事項を理解していることが前提条件であり，さらに，学習済みの動詞の焦点すべてを理解した上で，意味と焦点に合う語根と接辞を選択し，適切な相を用いる必要がある。学習済みの文法事項の知識を網羅しなければならないため，学習者の習得度が如実に表れる。誤用は，学習のある時点において学習者が用いている目標言語の言語システムの情報を提供するとされ（Corder, 1981: 10），誤用分析によって，習得度が低い文法事項や，学習者が困難を感じている点を明らかにすることができる。

日本の高等学校や大学，語学学校等で第二外国語として広く教授されているヨーロッパや東アジアの主要言語と比較すると，日本語話者に対するフィリピン語，ひいてはオーストロネシア諸語の教授法はこれまでほとんど研究されておらず，今後研究を進める必要がある。フィリ

ピン語教育において，本研究の結果を学習や指導の一助とし，今後の教授法の議論につなげたい。体系が異なる言語を学習する際の誤用を分析することにより，別の体系を持つ言語の習得との比較も可能となり，学習者や教授者の言語習得に役立つと考えられる。

2．存在文と所有文の構文

存在詞は may，mayroon，wala，marami の 4 つである。不特定の物や人の存在や所有を表し，may と mayroon は「ある／いる／持っている」，wala は「ない／いない／持っていない」，marami は「たくさんある／いる／持っている」を意味する。どの存在詞も名詞や所有物の有生性にかかわらず用いられる[1)]。may 以外の 3 つは繋辞の -ng（mayroon は -g のみ）を伴う。

2.1　名詞を伴う存在文と所有文

存在文の基本構文は存在詞＋名詞であり，必要に応じて場所や時を表す副詞が続く。この文には主題（Ang 形）は現れない。疑問文では疑問を表す副詞的小辞 ba が加わる。小辞は文の 2 番目の要素に位置するが，may の文では may とそれに続く名詞は切り離せないため，名詞の後に置かれる。繋辞を伴う mayroon，wala，marami の文では繋辞が ba の後に移動する。それぞれの存在詞が用いられている肯定文と疑問文の例を以下に示す。

肯定文の例

明日フィリピンで祭りがあります。

May piyesta　sa Pilipinas　bukas. / Mayroong piyesta sa Pilipinas bukas.
（祭り）（フィリピンで）（明日）

明日フィリピンで祭りはありません。

Walang piyesta sa Pilipinas bukas.

明日フィリピンで祭りがたくさんあります。

Maraming piyesta sa Pilipinas bukas.

疑問文の例

明日フィリピンで祭りがありますか？

May piyesta ba sa Pilipinas bukas? / Mayroon bang piyesta sa Pilipinas bukas?

明日フィリピンで祭りはないのですか？

Wala bang piyesta sa Pilipinas bukas?

明日フィリピンで祭りがたくさんありますか？

Marami bang piyesta sa Pilipinas bukas?

1）存在文と所有文の有生性との関連や所有文が表す意味については長屋（2018）に詳しい。

所有文の基本構文は，may の文では存在詞＋名詞＋所有者（Ang 形）である。may 以外の 3 つの存在詞が用いられる文では，所有者が人称代名詞の場合には語順等が異なる。Ang 形人称代名詞も文の 2 番目の要素に位置するため，所有者が人称代名詞の場合には存在詞＋所有者（Ang 形）＋名詞で，繋辞が人称代名詞の後に移動する[2)]。どの存在詞が用いられる文でも，必要に応じて場所や時を表す副詞が続く。

疑問文では疑問を表す副詞的小辞 ba が加わり，may の文では存在文の場合と同様に ba は名詞の後に置かれる。繋辞を伴う mayroon，wala，marami の文では，所有者が人称代名詞以外の場合には存在詞に繋辞が伴い，所有者が人称代名詞の場合には繋辞が人称代名詞の後に移動する。疑問文では，繋辞は ba と人称代名詞のうち後に置かれる語の後ろに移動する。どの存在詞が用いられる文でも，所有者が人称代名詞の場合，二人称単数の ka は ba に先行する。肯定文と疑問文の例を，所有者が人称代名詞の場合とそれ以外の場合とに分けて以下に示す。

所有者が人称代名詞以外の場合の肯定文の例

ナオミは本を持っています。

May aklat si Naomi. / Mayroong aklat si Naomi.
（本）（ナオミは）

ナオミは本を持っていません。

Walang aklat si Naomi.

ナオミは本をたくさん持っています。

Maraming aklat si Naomi.

所有者が人称代名詞の場合の肯定文の例

彼はお金を持っています。

May pera siya. / Mayroon siyang pera.
（金）（彼は）

彼はお金を持っていません。

Wala siyang pera.

彼はお金をたくさん持っています。

Marami siyang pera.

所有者が人称代名詞以外の場合の疑問文の例

ナオミは本を持っていますか？

May aklat ba si Naomi? / Mayroon bang aklat si Naomi?

2）may が用いられる文では，所有表現で名詞句が続く場合には，人称代名詞や ba が名詞句の間に入り，繋辞も移動する。存在表現で名詞句が続く場合には必須ではないが，同様に ba が名詞句の間に入る場合もある。今回分析対象とした動詞を伴う存在文と所有文では，修飾語や関係節が含まれるものは除外しているため，この型の文は含まれていない。
例：彼女は大きな本を持っています。 May malaki siyang aklat.
彼女は大きな本を持っていますか？ May malaki ba siyang aklat?

ナオミは本を持っていないのですか？

Wala bang aklat si Naomi?

ナオミは本をたくさん持っていますか？

Marami bang aklat si Naomi?

所有者が人称代名詞の場合の疑問文の例

彼はお金を持っていますか？

May pera ba siya? / Mayroon ba siyang pera?

彼はお金を持っていないのですか？

Wala ba siyang pera?

彼はお金をたくさん持っていますか？

Marami ba siyang pera?

2.2　動詞を伴う存在文と所有文

存在詞と動詞を組み合わせて用いることにより，「公園で走っている人がいる（誰かが公園で走っている）」，「彼らには考えていることがある（彼らは何かを考えている）」といった，行為者や，行為の対象や方向等が特定されない不定表現を作ることができる。構文は基本的には2.1で示したものと同様である。行為者焦点動詞や自動詞，使役者焦点動詞が用いられる場合には，存在文で名詞が置かれる位置に動詞が置かれ，行為者焦点以外の焦点動詞や使役者焦点動詞以外の使役動詞が用いられる場合には，所有文で名詞が置かれる位置に動詞が置かれる。

それぞれの存在詞が用いられている文の例を，行為者焦点動詞とそれ以外の焦点動詞に分けて以下に示す。wala と marami の構文は mayroon と同様のため，方向焦点動詞以降の例文では省略し，所有者が人称代名詞のもののみ例示する。以下に例示する動詞以外の焦点動詞や自動詞，および，各焦点動詞で他の接辞のものも同様に存在詞とともに用いられる。

行為者焦点動詞が用いられる文の例

公園で走っている人がいます（誰かが公園で走っています）。

May　tumatakbo　sa parke. / Mayroong tumatakbo sa parke.
（走っている）（公園で）

公園で走っている人はいません（誰も公園で走っていません）。

Walang tumatakbo sa parke.

公園で走っている人がたくさんいます。

Maraming tumatakbo sa parke.

行為者焦点以外の焦点動詞が用いられる文の例

対象焦点動詞

ケンにはあなたにあげるものがあります（ケンはあなたに何かをあげます）。

May ibibigay si Ken sa iyo. / Mayroong ibibigay si Ken sa iyo.
（あげる）（ケンは）（あなたに）

ケンにはあなたにあげるものがありません（ケンはあなたに何もあげません）。

Walang ibibigay si Ken sa iyo.

ケンにはあなたにあげるものがたくさんあります。

Maraming ibibigay si Ken sa iyo.

彼らには考えていることがあります（彼らは何かを考えています）。

May iniisip sila. / Mayroon silang iniisip.
（考えている）（彼らは）

彼らには考えていることがありません（彼らは何も考えていません）。

Wala silang iniisip.

彼らには考えていることがたくさんあります（彼らはたくさんのことを考えています）。

Marami silang iniisip.

方向焦点動詞

彼には昨日行ったところがあります（彼は昨日どこかへ行きました）。

May pinuntahan siya kahapon. / Mayroon siyang pinuntahan kahapon.
（行った）（彼は）（昨日）

受益者焦点動詞

私たちには料理してあげている人がいます（私たちは誰かに料理してあげています）。

May ipinagluluto kami. / Mayroon kaming ipinagluluto.
（料理している）（私たちは）

手段焦点動詞

あなたたちには支払う手段（代金）がありますか？

May ipambabayad ba kayo? / Mayroon ba kayong ipambabayad?
（支払う）（あなたたちは）

存在詞が用いられる文では，以下の複数の文法規則を理解する必要がある。(1) 存在文と所有文の構造が異なること，(2) mayとそれ以外の存在詞では，繫辞が必要なものと不要なものに分けられること，(3) 所有者が人称代名詞の場合とそれ以外の場合では，所有者が置かれる位置が異なること，(4) baを始めとする副詞的小辞とAng形人称代名詞は原則として2番目の要素に置かれるが，mayが用いられる文では注意が必要であること，(5) 繫辞が必要な存在詞が用いられる文では，小辞やAng形人称代名詞が含まれる場合に繫辞が移動すること，である。

加えて動詞を伴う存在文と所有文の場合には，(1) 適切な焦点を選択すること，(2) 焦点に合わせて正しい接辞を用いること，(3) 適切な相を選択すること，も必要である。さらに，擬似動詞が加わると，存在詞の繫辞とは別に，擬似動詞自体に繫辞が必要であり，適切に使用することも求められる。場所，方向，時を表す副詞等の他の要素が含まれることもあり，既存の知

識を駆使し，複数の注意点に気を配らなければならない。

3．調査対象と調査方法

本研究では，大阪大学外国語学部にて2019年度から2022年度に開講され，筆者が担当した中級フィリピン語の授業を調査対象とする。本授業は90分1コマで30回の通年科目として設定され，文法と構文を取り扱っている。1年生の必修5科目10単位を修得し，初級文法を習得したと認められたフィリピン語専攻2年生向け必修科目の1つである。授業の目的はフィリピン語を用いて積極的にコミュニケーションを取れるようになるために，中級文法と構文を身につけることである。言語学習の到達目標は概ね，専攻語到達度目標の「専攻語科目（2年実習）」の各項目（大阪大学外国語学部，2013）および，専攻語内で策定している進級基準に準じている。

受講者は2019年度13名，2020年度16名，2021年度15名，2022年度13名，延べ57名である。複数年度にまたがって当該授業を2度受講した者が6名含まれているため，実人数は51名である。50名は日本の高等学校を，1名のみフィリピンでインターナショナルスクールを卒業後に大学に入学している。日本の高等学校を卒業した者の第一言語は日本語，インターナショナルスクールを卒業した者の第一言語は日本語および英語である。フィリピン出身の母親を持つ者が1名いるが，幼少期よりフィリピン語に触れる機会はあったものの，文法や構文の知識は持ち合わせていなかったと考えられる。インターナショナルスクールを卒業した者も，フィリピンでは，家庭では日本語，学校では日本語または英語を用いており，フィリピン語は日常生活で耳にする程度で学習経験はほとんどなく，体系的な知識は持ち合わせていない。

フィリピン語専攻の2年生は本授業を含め週5コマの授業を受講している。年度によって異なるが，他の4コマの授業はネイティブ教員1名の授業が2コマまたは1コマ，日本人教員2名または3名の授業が各1コマである。各授業では，発音，会話，語彙，文法，読解等を均等に学べるよう配置しているが，重複している部分も多く，学習内容をより定着させやすいようにしている。本授業では，文法と構文を理解した上で，それらを用いて日本語の文をフィリピン語訳できるようにすることに重点を置いている。

フィリピン語専攻1年生が履修する初級文法と構文の授業では，行為者，対象，方向の各焦点動詞を学習していることから，本授業ではそれ以外の動詞や構文を学習する。名詞を伴う存在文と所有文は初級文法で学習済みである。年度によって進度が異なり，春～夏学期終了時に使役動詞まで学習を終えていることや，年度当初の予定より進度が前後することもあるが，学習項目の順は概ね表1に示した通りである。動詞を伴う存在文と所有文は，使役動詞を除く重要な動詞を一通り学習した後，春～夏学期の後半（表1では第10回と第11回）に学習する。

表1　各回の授業内容（2021年度）

授業回	授業内容
第1回	場所焦点動詞
第2回	受益者焦点動詞
第3回	手段焦点動詞
第4回	理由・原因焦点動詞
第5回	いろいろな接辞の行為者焦点動詞
第6回	いろいろな接辞の対象焦点動詞
第7回	いろいろな接辞の方向焦点動詞，話題焦点動詞
第8回	いろいろな接辞の自動詞
第9回	非行為者焦点動詞の可能・非意図形
第10回	存在詞と動詞を組み合わせた文（第1回）
第11回	存在詞と動詞を組み合わせた文（第2回）
第12回	学習内容を用いた作文の復習（第1回）
第13回	学習内容を用いた作文の復習（第2回）
第14回	学習内容の定着度の確認
第15回	学習内容の復習，使役者焦点動詞，被使役者焦点動詞
第16回	使役対象焦点動詞，使役方向焦点動詞，使役動詞の可能・非意図形
第17回	複数動詞，近完了
第18回	動詞の強意
第19回	動詞の程度緩和，動詞の反復表現
第20回	依頼・許可の表現，名詞化（動名詞）（第1回）
第21回	名詞化（動名詞）（第2回），名詞節（第1回）
第22回	名詞節（第2回）
第23回	修飾語句の位置，関係節（第1回）
第24回	関係節（第2回）
第25回	間投詞，終助詞，感嘆文，学習内容を用いた購読（第1回）
第26回	学習内容を用いた購読（第2回）
第27回	学習内容を用いた購読（第3回）
第28回	学習内容を用いた作文の復習
第29回	学習内容の定着度の確認
第30回	学習内容の復習

授業では，授業担当者による文法事項の解説の後，例文を音読しながら，文法事項の使われ方や構文の作り方を確認する。その後，練習用プリントにて，日本語の文をフィリピン語訳する問題に取り組み，学習内容を用いた文の作り方を練習する。受講生には予習と復習が奨励され，特に復習に重点を置き，理解度を確認することが求められている。感想や質問は，口頭で伝える，用紙に記入し提出する，LMS（学習管理システム）の機能や電子メールを用いて送る，等の手段で担当者に投げかけることができるようにしており，個別または全体に返答される。

冒頭ではほぼ毎回，前回または前々回の学習内容の理解度を確認する目的で小テストを実施し，授業担当者が添削・採点した後，次回の授業で返却している。各小問の満点は2点または

3点で，誤り1つにつき1点ずつ減点する形で採点している。返却の際には，誤りが目立つ箇所や再度説明が必要だと考えられる点を担当者が伝えている。小テストの内容は日本語の文をフィリピン語訳する問題が中心で，授業回によっては，語彙や空欄補充の問題も含まれる。期末試験では，フィリピン語訳，文の書き換え，条件付き自由作文で理解度を確認している。年度によっては，秋～冬学期の初回に，春～夏学期の学習内容の定着度を確認するためのテストを課すこともある。2020年度と2021年度には年度末に進級試験も実施した。

本研究で分析対象とするのは，各年度の該当回の小テスト，前期末試験，夏季休業明けテスト，および進級試験の該当問題の解答である。ただし2022年度については，春～夏学期までのものを用いる。答案の大半は教室で手書きして提出されているが，2020年度は一部遠隔授業であったため，LMS上で入力し提出されたものが含まれる。

4．分析データ

分析に用いる日本語文とそれに対応するフィリピン語の正しい文は表2に示した34種類である。複数の文で同じ語根や接辞の動詞が用いられているものもある。行為者焦点動詞が用いられる文のみ存在文，その他の焦点動詞が用いられる文は所有文である。(33) と (34) では，行為者焦点動詞以外の焦点動詞に非意図・可能・完了等の意味を付加する接頭辞MA-が必要である。日本語文の後に（　）で示している語は，存在詞を限定し，その語を用いて書くようにと指示したものである。焦点を当てるべき方向や対象が判別しづらい日本語文には，使用すべき焦点動詞を解答者が迷わないようにするために別の日本語文が併記してある。

表2　分析に用いる日本語文と対応するフィリピン語の正しい文

焦点	日本語文と対応するフィリピン語文
行為者	(1) ここで彼を手伝った人がいます。(may) May tumulong sa kanya rito. (rito は dito でも可。)
	(2) 私の母をさっき手伝った人がいます。(may) May tumulong sa nanay ko kanina. (sa nanay ko と kanina は逆順も可。)
	(3) あなたたちに対して怒っている人はいますか？（mayroon） Mayroon bang nagagalit sa inyo?
	(4) あの映画を観たくない人はたくさんいますか？ Marami bang ayaw (na) manood ng sineng iyon? (sine は pelikula でも可。)
対象	(5) 彼らには探している物がたくさんあります。 Marami silang hinahanap.
	(6) 彼は私に何も言いませんでした。 Wala siyang sinabi sa akin.
	(7) 私はあの先生に質問したいことがあります。 Mayroon akong gustong itanong sa gurong iyon. / May gusto akong itanong sa gurong iyon.

対象	(8) 私たちにはあなたに質問したいことはありません。 Wala kaming gustong itanong sa iyo.
	(9) 私たちにはあなたに聞くべきことはありません。 Wala kaming dapat (na) itanong sa iyo. / Wala kaming kailangang itanong sa iyo.
	(10) 私に質問したいことがたくさんありますか？ Marami ka bang gustong itanong sa akin? / Marami ba kayong gustong itanong sa akin?
	(11) 明日彼の授業であなたたちが質問すべきことはないのですか？ Wala ba kayong dapat (na) itanong sa klase niya bukas? (sa klase niya と bukas は逆順も可。)
	(12) あの教師にはあなたたちに教えるべきことがありません。 Walang dapat (na) ituro sa inyo ang gurong iyon. / Walang kailangang ituro sa inyo ang gurong iyon. (sa inyo と ang gurong iyon は逆順も可。)
	(13) 彼らには学校で気づいたことがありませんでした。 Wala silang napansin sa paaralan.
	(14) サヤには理解できたことが何もありませんでした。 Walang naintindihan si Saya.
	(15) 彼の授業で私たちが理解したことはたくさんあります。 Marami kaming naintindihan sa klase niya.
	(16) 学生たちには毎年学校で経験していることがたくさんあります。 Maraming nararanasan ang mga estudyante sa paaralan taun-taon. (paaralan は eskwelahan でも可。ang mga estudyante と sa paaralan と taun-taon の順は，taun-taon sa paaralan ang mga estudyante，taun-taon ang mga estudyante sa paaralan，sa paaralan ang mga estudyante taun-taon，sa paaralan taun-taon ang mga estudyante，ang mga estudyante taun-taon sa paaralan も可。)
方向	(17) 彼らには明日贈り物をあげる人(相手)がいます(彼らは明日誰かに贈り物をあげます)。(mayroon) Mayroon silang bibigyan ng regalo bukas.
	(18) 彼らには後でお金をあげる人(相手)がいます(彼らは後で誰かにお金をあげます)。(mayroon) Mayroon silang bibigyan ng pera mamaya.
	(19) 彼らには明日靴をあげる人 (相手) がいます (彼らは明日誰かに靴をあげます)。(mayroon) Mayroon silang bibigyan ng sapatos bukas.
	(20) 私には後で行くところはありません。 Wala akong pupuntahan mamaya.
	(21) 私には明日の朝行くところがあります。 Mayroon akong pupuntahan bukas ng umaga. / May pupuntahan ako bukas ng umaga.
	(22) 彼らには行きたいところがたくさんありました。 Marami silang gustong puntahan.
	(23) 私には来月行くところがあります。(mayroon) Mayroon akong pupuntahan sa isang buwan. (sa isang buwan は sa susunod na buwan でも可。)
	(24) 看護師たちには助けるべき人がたくさんいます。 Maraming dapat (na) tulungan ang mga nars.
	(25) あなたたちにはあそこで助けるべき人がいないのですか？ Wala ba kayong dapat (na) tulungan doon? / Wala ba kayong kailangang tulungan doon?
	(26) 彼女には待っている人がいます (彼女は誰かを待っています)。 Mayroon siyang hinihintay. / May hinihintay siya.
受益者	(27) あなたには料理してあげた人がたくさんいますか？ Marami ka bang ipinagluto?
	(28) 彼のいとこにはお金を借りてあげた人がいます。 May/Mayroong inihiram ng pera ang pinsan niya. (inihiram は ipinaghiram でも可。)

手段	(29) 彼女にはそれを支払っているもの（手段）があります。(may) May ipinambabayad siya niyan.（ipinambabayad は ipinapambayad でも可。）
	(30) 私のお手伝いさんにはマンゴーを切るものがありません。 Walang ipanghihiwa ang katulong ko ng mangga. （ipanghihiwa は ipapanghiwa でも可。ang katulong ko と ng mangga は逆順も可。）
	(31) 彼女には掃除するのに使ったもの（道具）があります。(may) May ipinanlinis siya.
	(32) 彼女には掃除しているもの（道具）があります。(may) May ipinanlilinis siya.（ipinanlilinis は ipinapanlinis でも可。）
対象 ＋可能	(33) アンには市場で買えた物があります。(mayroon) Mayroong nabili si Ann sa palengke.（si Ann と sa palengke は逆順も可。）
	(34) アンにはあそこで買えた物があります。(mayroon) Mayroong nabili si Ann doon.（si Ann と doon/roon は逆順も可。）

分析に用いる誤用のデータは，1つの文に誤用が1つのみのものとする。当該授業では口語による表現は扱っていないことと，2020年度のLMS上の入力ではタイプミスが多発し[3]，誤用か否か判断しかねることから，言語学的範疇に基づくもののうち，音韻と正書法は除く。また，日本語をフィリピン語に変換させたものを分析対象とするため，形態統語上の誤用のみを扱い，語用論的な誤用は扱わない。受講者が適切な語等が思いつかない状態で一部空欄としたことが明らかで文が完成していないもの，使役動詞を用いる必要があるもの，関係節が用いられているものも，別の分析視点が必要となるため除外する。

5．調査結果

誤用には主に言語学的範疇に基づく類型と表層構造に着目した類型がある。言語学的範疇に基づくものは，音韻，正書法，文法（統語と形態），語彙，談話といった部門に分けられる。一方，表層構造に着目したものは，項目の脱落による誤り，項目の付加による誤り，項目の誤用，語順の誤りに分けられる（デュレイ・バート・クラッシェン , 1984: 106–117）。調査結果では，まず言語学的範疇に基づくものの結果を示し，その後，デュレイ・バート・クラッシェン（1984）の類型に基づき，表層構造に着目したものを示す。

言語学的範疇に基づく誤用では，語・句レベルの誤りとして標識辞，動詞の相，動詞の活用，動詞の焦点，動詞の接辞，文レベルの誤りとして繋辞，語彙の誤りとして語彙の選択，の順に示す。表層構造に基づく誤用では，項目の脱落，項目の付加，項目の誤用，語順，の順に示す。表2で各文に記した番号に基づき，(1) の誤用1例目には（1–1），2例目には（1–2）と順に採番する。

3）授業評価アンケート等に寄せられた遠隔授業に関する受講者の感想に，「提出してから打ち間違いに気づくことがある」といった声が複数寄せられていた。初級の学習者でも書き間違えることはほとんどないと考えられる，標識辞や人称代名詞の綴りの誤りも散見された。

5.1 言語学的範疇に基づく誤用

5.1.1 標識辞

フィリピン語の標識辞には主格のAng形，属格のNg形，斜格のSa形がある。動詞が用いられない文や行為者焦点動詞が用いられる文では，Ang形は主題（行為者焦点動詞では行為者），Ng形は所有や目的，Sa形は時や場所・方向等を示す。以下の4つの誤用ではすべて，方向に当たる部分にSa形を用いるべきところ，（1-1）と（7-1）ではAng形が，（1-2）と（2-1）ではNg形が用いられている。（1）や（2）における「～を手伝う」は，日本語では「～を」が用いられるため対象のように思われるが，フィリピン語では方向であり，Sa形を用いる必要がある。

（1-1） May tumulong siya rito.

（7-1） Mayroon akong gustong itanong ang gurong iyon.

（1-2） May tumulong niya rito.

（2-1） May tumulong ng nanay ko kanina.

所有文では所有者の標識辞を誤る例が多く見られた。所有者はAng形にすべきであるが，Ng形を用いた誤用が多い。少ないものの，（20-1）のように，所有者にSa形を用いた誤用もある。

（7-2） May gusto kong itanong sa gurong iyon.

（14-1） Walang naintindihan ni Saya.

（16-1） Maraming nararanasan ng mga estudyante sa paaralan taun-taon.

（17-1） Mayroon nilang bibigyan ng regalo bukas.

（24-1） Maraming dapat tulungan ng mga nars. / Maraming dapat na tulungan ng mga nars.

（25-1） Wala ba ninyong dapat tulungan doon?

（27-1） Marami mo bang ipinagluto?

（28-1） May ipinaghiram ng pera ng pinsan niya.

（28-2） Mayroong inihiram ng pera ng pinsan niya.

（30-1） Walang ipanghihiwa ng mangga ng katulong ko.

（32-1） May ipinapanlinis niya.

（20-1） Walang pupuntahan sa akin mamaya.

5.1.2 動詞の相

フィリピン語の相には不定相，完了相，未完了相，未然相がある。不定相は命令文，擬似動詞と組み合わせる場合，行為が開始されるかどうか不明な場合に用いられる。完了相は行為が既に完了している場合，未完了相は行為が開始されたものの完了していない場合，未然相は行為が開始されると予期される場合に用いられる。

（4-1），（8-1），（11-1）では，動詞が擬似動詞とともに用いられるため，不定相を用いるべ

きであるところ，未然相にしている。

（4-1）　Marami bang ayaw manonood ng sineng iyon?

（8-1）　Wala kaming gustong itatanong sa iyo.

（11-1）　Wala ba kayong dapat na itatanong sa klase niya bukas?

（16），（29），（32）ではすべて未完了相を用いるべきであるが，（16-2）は完了相，（29-1）は不定相，（32-2）は未然相を用いている。（34-1）は完了相を用いるべきところ未完了相を用いた誤用である。

（16-2）　Maraming naranasan ang mga estudyante sa eskwelahan taun-taon.

（29-1）　May ipambayad siya niyan.

（32-2）　May ipanlilinis siya.

（34-1）　Mayroong nabibili si Ann doon.

5.1.3　動詞の活用

ここでは，動詞の相とは別に，活用の形に誤用が見られるものを示す。

-IN 動詞は完了相と未完了相，および，行為者焦点以外の焦点動詞の非意図・可能形の接辞 MA- がつく場合にも接尾辞 -IN が脱落するが，（26-1）と（33-1）ではつけたままにしている。

（26-1）　Mayroon siyang hinihintayin.

（33-1）　Mayroong nabilhin si Ann sa palengke.

（21-1）で用いられている動詞 puntahan は，未然相では語根の第一音節の子音と母音を重複させるべきであるが，2 度重複させてしまっている。

（21-1）　Mayroon akong pupupuntahan bukas ng umaga.

対象焦点の MA-AN 動詞の完了相は語頭 MA を NA に変化させるが，（14-2）では不定相 maintindihan の頭に na をつけた形にしている。

（14-2）　Walang namaintindihan si Saya.

非意図・可能の意味を表す接辞 MA- が付加された動詞では，完了相は MA を NA に変化させるが，（33-2）では -IN 動詞の完了相を作る要領で，IN を語根の第一音節の間に挿入している。

（33-2）　Mayroong mabinili si Ann sa palengke.

5.1.4　動詞の焦点

用いるべき焦点と誤って用いた焦点には，多様な組み合わせが見られた。ここでは，用いるべき焦点別に誤用例を挙げる。

行為者焦点にすべきところ，方向焦点にしたものが（3-1）である。MA- 動詞を用いるべきところ，接辞 KA-AN を用いて方向焦点動詞にしている。

（3-1）　Mayroon bang kinagagalitan sa inyo?

次の7つの誤用ではすべて対象焦点動詞を用いるべきところ，別の焦点を用いている。（8−2），（9−1）は -UM- 動詞を用いて行為者焦点に，（7−3），（8−3），（10−1）は -IN 動詞，（12−1），（12−2）では -AN 動詞を用いて方向焦点にしており，（12−2）では非意図・可能の意味を表す接辞 MA- もつけてしまっている。（5−1）のように -AN をつけて場所焦点動詞にしたものや，（5−2）のように I- 動詞の受益者焦点[4]にしたものも見られた。（5−3）は対象焦点を用いているものの，使役動詞の接辞 PA- をつけたため，「探させる，探すよう依頼される」という意味になってしまった。

（8−2） Wala kaming gustong tumanong sa iyo.

（9−1） Wala kaming kailangang tumanong sa iyo.

（7−3） Mayroon akong gustong tanungin sa gurong iyon.

（8−3） Wala kaming gustong tanungin sa iyo.

（10−1） Marami ka bang gustong tanungin sa akin?

（12−1） Walang dapat na turuan ang gurong iyon sa inyo.

（12−2） Walang dapat maturuan sa inyo ang gurong iyon.

（5−1） Marami silang hinahanapan.

（5−2） Marami silang inihahanap. / Marami silang ihinahanap.

（5−3） Marami silang ipinahahanap.

向かうところや相手に焦点が当たっている場合には方向焦点動詞を用いるべきである。「助ける・手伝う」相手は日本語では「〜を」と対象として表されるが，フィリピン語では方向である。（17−2），（19−1）は MAG- 動詞，（18−1），（20−2），（22−1），（25−2）は -UM- 動詞を用いて行為者焦点にした誤用である。（17−3），（18−2），（19−2）では I- 動詞の対象焦点が，（19−3）では IPAG- 動詞の受益者焦点[5]が用いられている。（20−3）は方向焦点を用いているものの，使役動詞の接辞 PA- をつけたため，「行かせる，行くよう依頼する」という意味になってしまった。

（17−2） Mayroon silang magbibigay ng regalo bukas.

（19−1） Mayroon silang magbibigay ng sapatos bukas.

（18−1） Mayroon silang bibigay ng pera mamaya.

（20−2） Wala akong pupunta mamaya.

（22−1） Marami silang gustong pumunta.

（25−2） Wala ba kayong dapat tumulong doon?

（17−3） Mayroon silang ibibigay ng regalo bukas.

（18−2） Mayroon silang ibibigay ng pera mamaya.

4）対象焦点動詞では I- と -IN が用いられ，両方が用いられる語根も一部あるが，語根 hanap の場合，-IN が対象焦点，I- は受益者焦点と使い分ける。

5）接辞 IPAG- は一部の対象焦点動詞等にも用いられるため，受益者焦点以外の焦点と誤った可能性もある。

（19−2） Mayroon silang ibibigay ng sapatos bukas.

（19−3） Mayroon silang ipagbibigay ng sapatos bukas.

（20−3） Wala akong papupuntahan mamaya.

受益者焦点動詞と手段焦点動詞とを取り違えたと考えられる誤用もある。（27−2）は受益者焦点動詞を用いるべきところ手段焦点動詞を，（31−1）は逆に手段焦点動詞とすべきところ受益者焦点動詞を用いている。

（27−2） Marami ka bang ipinanluto?

（31−1） May ipinaglinis siya.

次の（30−2）では手段焦点を用いて，切る手段がないという意味にすべきところ，対象焦点の -IN 動詞を用いたため，切る対象物としての何かがないという意味になっている。（29−2）の誤用は接辞の選択を誤ったのか，焦点を誤ったのか判別が難しい事例である。接辞 IPANG- を用いて手段焦点動詞にすべきところ，接辞 IPA- を用いており，使役対象動詞にした可能性がある。

（30−2） Walang hihiwain ng mangga ang katulong ko.

（29−2） May ipinababayad siya niyan.

以下の 5 つは対象焦点の -IN 動詞に非意図・可能の意味を表す接辞 MA- をつけるべきものの誤用である。（33−3），（34−2）は行為者焦点動詞に行為者焦点の非意図・可能の意味を表す接辞 MAKA- をつけている。（33−4），（34−3）は受益者焦点 I- 動詞の可能形とした誤用である。（33−5）は使役者焦点動詞を用いており，可能の意味は表されていない。

（33−3） Mayroong nakabili si Ann sa pelengke.

（34−2） Mayroong nakabili si Ann doon.

（33−4） Mayroong naibili si Ann sa palengke.

（34−3） Mayroong naibili roon si Ann.

（33−5） Mayroong nagpabili si Ann sa palengke.

5.1.5　動詞の接辞

焦点の誤りの中にも接辞を取り違えたことによるものが含まれるが，動詞の語根と焦点と相は正しいものの，接辞の誤りによって別の意味になってしまった誤用も見られた。

以下の（1−3），（2−2）では，「助ける・手伝う」を表すために -UM- 動詞で tumulong とすべきところ，MAG- 動詞にしたため，「協同する」という意味になってしまった。（13−1）では MA- 動詞を用いるべきところ，-IN 動詞を用いたことにより，「注意を払う」という意識的な行為を表す意味になっている。

（1−3） May nagtulong sa kanya rito.

（2−2） May nagtulong sa nanay ko kanina.

（13−1） Wala silang pinansin sa paaralan.

非意図・可能の意味を表す接辞 MA- を不要な場合につけた誤用や，逆に必要な場合につけなかった誤用もある。（30-3）と（32-3）はつけたもの，（33-6），（34-4）はつけなかったものである。

（30-3） Walang maipanghiwa ng mangga ang katulong ko.

（32-3） May naipanlilinis siya.

（33-6） Mayroong binili si Ann sa palengke.

（34-4） Mayroong binili si Ann doon.

接辞を取り違えたことにより，動詞以外の品詞や存在しない語彙を用いた誤用もある。（1-4）では -UM- 動詞とすべきところ，存在しない -IN 動詞を活用させたような語彙になった。（15-1）では MA-AN 動詞とすべきところ，-AN のみをつけたため，「相互理解」を意味する名詞になってしまった。（20-4），（21-2）では -AN 動詞とすべきところ，-IN がつけられている。「目的」を意味する puntahin という名詞は存在するが，動詞はないため，活用させることはできない。

（1-4） May tinulong sa kanya rito.

（15-1） Marami kaming intindihan sa klase niya.

（20-4） Wala akong pupuntahin mamaya.

（21-2） May pupuntahin ako bukas ng umaga.

以下の文では動詞を置くべき位置に，「聞く＝質問する」の語根 tanong に接頭辞 PAG- がついた動名詞が用いられている。

（8-4） Wala kaming gustong pagtanong sa iyo.

5.1.6 繋辞

擬似動詞が用いられている場合に，存在詞につけるべき繋辞はつけられているものの，擬似動詞につけるべき繋辞が脱落している誤用が見られた。

（7-4） Mayroon akong gusto_ itanong sa gurong iyon.

（10-2） Marami ka bang gusto_ itanong sa akin?

（25-3） Wala ba kayong kailangan_ tulungan doon?

一方，存在詞につけるべき繋辞はつけられているにもかかわらず，繋辞が不要な別の語にも繋辞が付加されている誤用も見られた。

（17-4） Mayroon silang bibigyang ng regalo bukas.

（27-3） Maraming ka bang ipinagluto?

（4-2）では小辞の ba を存在詞のすぐ後に置いたものの，繋辞を移動させるのを忘れている。

（4-2） Maraming ba ayaw manood ng sineng iyon?

5.1.7　語彙の選択

語彙の選択に関しては，動詞の語根を別の語根と取り違えたものが多く見られた。綴りが似ているものや，音節を入れ替えると似た音の別の語になるものを選択する誤用が多い。

以下の２つの文では，動詞の焦点と接辞はどちらも正しい。しかし，（5-4）では「探す」の語根 hanap を「困難」を表す hirap に取り違えて対象焦点動詞にしたため，「苦しむ」という意味になり，文全体の意味は「彼らには苦しみを与えている人（相手）がたくさんいます」となってしまった。（7-5）では「質問する」の語根 tanong を「捨てる」の語根 tapon と取り違えたため，「私はあの先生に対して捨てたいものがあります」という文になっている。

（5-4）　Marami silang hinihirap.

（7-5）　Mayroon akong gustong itapon sa gurong iyon.

焦点は正しいものの，文の意味が異なっているのが以下の２つの文である。（1-5）では「助ける・手伝う」の語根 tulong を用いるべきところ，「眠る」の語根 tulog を用いたため，「彼のところで眠った人がいる」という意味に，（13-2）では「気づく」の語根 pansin を「考える」の語根 isip と取り違え，「彼らには学校で思いついたことはなかった」という意味になった。

（1-5）　May natulog sa kanya dito.

（13-2）　Wala silang naisipan sa paaralan.

語根を取り違えたことにより，動詞以外の品詞や存在しない語彙が用いられた誤用もある。以下の２つの文では，「助ける・手伝う」の語根 tulong を用いるべきものであるが，（24-2）では tulong を tuog と記載したため意味が通じなくなり，（25-4）では「眠る」の語根 tulog を用いてそこに -IN をつけたため，「よく眠る」を表す形容詞になっている。

（24-2）　Maraming dapat makatuog ang mga nars.

（25-4）　Wala ba kayong dapat tulugin doon?

フィリピン語の人称代名詞では，一人称複数形に排除形と包含形が存在する。（8-5）の文では，「あなた」に対して「私たち」が質問するということから，「私たち」には「あなた」が含まれないため排除形にすべきところ，包含形を用いている。

（8-5）　Wala tayong gustong itanong sa iyo.

日本語の意味を取り違えたものもあり，（9-2）は「聞く＝質問する」を「聞こえる」とした誤用である。

（9-2）　Wala kaming dapat marinig sa iyo.

5.2　表層構造に基づく誤用

5.2.1　項目の脱落

所有者や動詞が脱落することはあまりないものの，対象物や方向が脱落する例は見られた。（3-2）では存在詞の直後にあるべき小辞 ba が，（8-6）では語尾に「あなたに」の sa iyo が，

（17-5）では対象物の「贈り物を」を表す ng regalo が脱落している。

（3-2） Mayroong nagagalit sa inyo?

（8-6） Wala kaming gustong itanong ____.

（17-5） Mayroon silang bibigyan ____ bukas.

（7-6）と（8-7）では擬似動詞が脱落しており，（7-7）では擬似動詞の脱落により，擬似動詞が入った正用の場合の語順とリンカーにも不具合が生じている。

（7-6） May ____ itanong ako sa gurong iyon.

（8-7） Wala kaming ____ itanong sa iyo.

5.2.2 項目の付加

項目の付加の大半は複数の誤用が含まれる文中に見られ，1つのみの誤用が含まれる文では少なかった。（20-5）では動詞の前に主題を表す標識辞が，（20-6）では行為者焦点以外の焦点動詞で行為者を表す人称代名詞の Ng 形が用いられているが，どちらも不要である。

（20-5） Wala akong ang pupuntahan mamaya.

（20-6） Wala akong pupuntahan ko mamaya.

5.2.3 項目の誤用

項目の誤用も，文中に誤用が1つのみの場合には以下の2例のみが見られ，大半は複数の誤用が含まれる文中に見られた。（1-6）は，近称の指示代名詞の Sa 形 rito「ここで」とすべきところを遠称の roon「あそこで」と誤った例，（29-3）は中称の指示代名詞の Ng 形 niyan「それを」とすべきところを近称の nito「これを」と誤った例である。

（1-6） May tumulong sa kanya roon.

（29-3） May ipinambabayad siya nito.

5.2.4 語順

語順の誤用では，文の要素の2番目の位置に置くべき人称代名詞の Ang 形や小辞のそれぞれの位置や，それらが組み合わせて用いられている場合に並べる順を誤ることが多い。（8-8），（20-7），（27-4）は，人称代名詞の Ang 形や小辞 ba を移動させず，動詞または擬似動詞の後に残したままにした誤用，（10-3）と（27-5）は人称代名詞 ka と小辞 ba の語順を逆にしたものである。

（8-8） Walang gusto kaming itanong sa iyo.

（20-7） Walang pupuntahan ako mamaya.

（27-4） Maraming ipinagluto ka ba?

（10-3） Marami ba kang gustong itanong sa akin?

（27-5） Marami ba kang ipinagluto?

人称代名詞以外の所有者 Ang 形は文の要素の 2 番目に移動させる必要はないが，（14-3）のように，人称代名詞が用いられる文と同様に移動させてしまった誤用も見られた。

（14-3） Walang si Saya naintindihan.

6．誤用の原因と教授法への示唆

以上の結果に基づき，誤用の原因と教授法への示唆を考察する。考えられる誤用の原因は，起点言語の言語転移，目標言語の言語転移，学習ストラテジー，既習の文法事項等の消化吸収不良の 4 点である。言語転移には正の転移と負の転移があるが，誤用では負の転移が見られる。

起点言語の言語転移は，学習者の第一言語である日本語の影響を受け，日本語の文法規則をフィリピン語に適用させることである。5.1.1における「～を手伝う」に対応させて方向を表す Sa 形の標識辞を用いるべきところ，対象を表す Ng 形を用いた複数の誤用では，日本語の負の転移が顕著に見られる。5.2.2で挙げた（20-5）では動詞の前に主題を表す標識辞 ang が挿入されていた。日本語では「行くところは」と「は」が用いられており，対応する部分に ang を入れたものと考えられる。5.1.7で挙げた一人称複数形の排除形と包含形の混同も，日本語には一人称複数形を表す語彙が「私たち」という 1 種類しかないことが影響していると考えられる。

5.1.4における動詞の焦点の誤りの中で，行為者焦点動詞以外の焦点動詞を用いるべきところ，行為者焦点動詞を用いたものについては，日本語にはフィリピン語のような焦点が存在しないことや，日本語文ではすべて能動態が用いられていることが影響している可能性が高い。日本語文で動詞の部分のみを手がかりにしても，どの焦点を用いるべきか判断することはできない。文全体を理解し，その文では何に焦点が当てられているかを捉える必要があるが，日本語にはない視点が必要となるため，学習者が困難を感じると考えられる。

目標言語の言語転移は，フィリピン語の文法規則を過剰般化させ，その規則を用いるべきでないところで用いる，または用いるべきところで用いないことである。5.2.2 で挙げた（20-6）では，動詞の後に Ng 形の行為者が挿入されていた。行為者焦点動詞以外の焦点動詞が用いられる一般的な叙述文では，動詞の後に Ng 形の行為者が置かれるため，所有文でも同様の規則を適用してしまったと考えられる負の転移である。5.1.1 における，Ang 形にすべき所有者を Ng 形にする多数の誤用も同様であると考えられる。存在詞と行為者焦点動詞以外の焦点動詞とが組み合わせて用いられる文の構造における特有の困難さが現れていると言える。

5.1.5では，行為者焦点動詞以外の焦点動詞に非意図・可能の意味を加える接辞 MA- を，つける必要のないところにつける，または逆に，つける必要があるところにつけない，という誤用が複数見られた。MA- の役割を理解できていない可能性もあるため，既習の文法事項等の消化吸収不良に該当するとも言えるが，接辞 MA- の文法規則を過剰般化させたとも考えられる。

学習ストラテジーのうち，直接ストラテジーである記憶ストラテジーも誤用に影響していると考えられる。5.1.4の動詞の焦点の誤用における似た接辞同士の取り違えや，5.1.7における動詞の語根の取り違えでは，似た音や似た綴りの接辞や語根同士の混同が見られた。完全な正解でなくとも部分点が獲得できるという採点方法が影響を及ぼし，誤りがある，または，足りない項目がある，と認識していても，誤ったままの状態や脱落させたままの状態で解答を提出した可能性も否定できないが，似ているもの同士を結びつけて記憶しようとしたか，似ているもの同士を混同させないように記憶しようとして失敗したということが推測される。

既習の文法事項等の消化吸収不良には，誤用例の多数が当てはまる。5.2.4では所有文における所有者や小辞の位置を誤った事例が，5.1.6では繋辞の脱落や位置の誤用が複数挙げられた。所有者や小辞の適切な語順は，初級で学習する，動詞を伴わない所有文における語順の規則と同様である。擬似動詞と動詞を組み合わせて用いる場合には繋辞が必要であることや，人称代名詞や小辞が入る場合にはその後に繋辞が移動すること等も初級で学習済みである。5.1.2における動詞の相の誤用や，5.1.4における動詞の焦点の誤用，5.1.5における動詞の接辞の誤用，5.1.7における動詞の語根の取り違えも，初級から中級にかけて学習済みである文法項目が定着していないことが要因となっている可能性がある。

しかし，存在詞が用いられる文では，1文の中に複数の注意すべき文法事項が含まれるため，すべてを完全に処理することができなかったとも考えられる。5.2.1で挙げた項目の脱落では，語彙が思い出せなかったという可能性や，5.2.3で挙げた指示代名詞の誤用については，初級で学習済みである近称，中称，遠称のそれぞれの形を習得できていないという可能性もある。しかし，複数の要素を適切に使用する必要がある文を書くに当たっては，細部にわたって注意力が求められ，存在詞が用いられていない文であれば誤らない事項も誤るといったことが起こり得ることから，文の構造や動詞の焦点等に注意を向けるあまり，その他の項目に対する注意が疎かになったとも考えられる。この点も，存在詞が用いられる文を書く場合に学習者が感じる特有の困難さであると言える。

学習者の困難を軽減し，効果的に学習することや文法の正確さを高めることを手助けするためには，存在文と所有文の構文を教える際に現在用いられている説明に関して学習者が理解しづらいと感じる部分を検討し，問題を改善することも必要であろう。また，動詞を伴う存在文と所有文における適切な動詞の焦点を把握しやすくするために，文法事項の説明順を工夫し，関係節を先に学習し，動詞が修飾語となり名詞を修飾する構造を理解しておくことも有効であろう。その他にも以下のような教授法を講じることができると考えられる。

動詞を伴う存在文と所有文の文全体の意味を理解し，焦点を判断できるようにするため，認知ストラテジーを工夫する必要がある。文の意味を文字として理解するのみならず，情景を頭の中に描けるようにすることが効果的である。また，メタ認知ストラテジーとして，学習者自身や他の学習者が書いた文の誤りを修正するという学習法も，客観的な理解を促すであろう。

記憶ストラテジーとして音声を活用することも有効である。本研究で調査対象とした授業では，授業中に受講者は例文を音読しているものの，その時間は限られている。文法規則としてインプットした上で文字としてアウトプットするだけでなく，教授者や他の受講者の発話や音声データ，または，受講者自身の発話を通して自分の口から出る音を耳からインプットすることにより，型としてアウトプットすることも併用できれば習得度が高まると考えられる。

本研究では，フィリピン語の動詞を伴う存在文と所有文の誤用を分析し，誤用の原因を考察した。学習直後の誤用と学期末や学年末に見られる誤用とを比較して学習時期による誤用の変化を把握すること，理解可能性と誤りの重大さという視点からの分析，1文に複数の誤用が含まれる場合の分析も必要であり，これらの点は今後の課題としたい。

参考文献

Corder, S. P.（1981）*Error Analysis and Interlanguage*, New York: Oxford University Press.

Dulay, H., M. Burt and S. Krashen（1982）*Language Two*, New York: Oxford University Press.（『第2言語の習得』牧野髙吉訳，鷹書房弓プレス，東京，1984年。）

長屋尚典（2018）「タガログ語の所有と存在のあいだ」『東京大学言語学論集』39, 223–242.

大阪大学外国語学部（2013）「専攻語について」Retrieved from https://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/kyoumu/ns/st.html（2022年9月18日アクセス）

Oue, M.（1997）“Ang Pagpapahusay sa Pagtuturo ng Wikang Filipino sa mga Estudyanteng Hapones: Mga Suliranin at Solusyon.” *Daluyan: Journal ng Sentro ng Wikang Filipino sa mga Talakayang Pangwika*, 8（1–2), 21–33.

高野邦夫（2009）「フィリピン語教育の実践と改善の模索 ―― 拓殖大学国際学部地域言語フィリピン語の授業を一事例として」『拓殖大学語学研究』120, 295–314.

高野邦夫（2010）「フィリピン語作文の誤用例 ―― 拓殖大学国際学部地域言語フィリピン語ライティングの授業を一事例として」『拓殖大学語学研究』122, 185–198.

矢元貴美（2018a）「フィリピン語専攻の初学者の誤用分析 ―― 動詞導入前の誤用例から」『EX ORIENTE』25, 191–214.

矢元貴美（2018b）「子ども向けフィリピン語教材の開発と評価 ―― 中学校・高等学校・大学での授業実践から」『外国語教育のフロンティア』1, 29–40.